

第二節

観自在菩薩による衆生救済宣言

観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄

【漢文直訳】（宮元啓一氏による・以下同じ）

観自在菩薩は、深い般若波羅蜜多を行ぜしとき、五蘊はみな空なりと照見して、一切の苦厄を度したまえり。

【サンスクリット語直訳】（宮元啓一氏による・以下同じ）

聖なる観音菩薩は、深い般若波羅蜜多という行を修していたとき、[われわれの身心を構成する]集まりには五つあると見きわめた。そして、彼は、それらが本体を欠いている（本体空）と見てとった。

【現代用語による解釈】

[定義：五蘊とは『世界』であり、それは即ち《全存在》である]

観音様は、般若波羅蜜多の瞑想と行を实践した時に、お姿を現し、以下を明らかにされた。

五蘊には既に皆、《宇宙の理念》が表現された状態である。そして《全存在》は皆、既に全肯定されている。

五蘊は《宇宙の生命活動》そのものであり、《宇宙の生命活動》そのものが、《全存在》の本質である。

観音様は、この真実によって『人間』の係わる『世界』の一切の苦厄を解決する、衆生救済の道を示された。

（※ここから、般若心経本文が始まる）

□先ずこの節では、般若心経の総論が示される。

この節は、観音様の世界から、『世界』を見ると、このようにみえるという見解を示したものである。そして、これが我々『人間』の最終目標となるのである。次節以降は各論となる。

□ここでの五蘊の意味は、観音様から見た『世界』、であるとした。五蘊には元々通常の『人間』という意味以外にも、『世界』という意味をも持つので、この解釈で問題はないと判断した。

『世界』は当然『人間』を含むのだが、ここには『人間』が係わって織りなす『世界』という意味を込めている。

般若心経劇場の舞台設定

◆解説キー◆ 多少複雑な舞台設定に重要な意味が隠されている。

□形而上学的な表現を恐れなければ、般若心経とは、観自在菩薩（以下、観音様と表記する）が舍利子（シャーリプットラ）の前に靈的に現れて、「空からの展開」のための深い瞑想により、

教えを説き、その教えに仏陀がお墨付きを与えたものとして、タイトルの頭に仏陀の名を入れた、という設定になっている。

前節で述べたように、玄奘三蔵版の般若心経を正規の般若心経として解釈を進めたいので、舞台設定の描写に詳しい、般若心経大本の内容を、ここに持ち込むことは避けた。そのために舞台設定は、敢えてここまでの表現にとどめた。

そして、この舞台設定が歴史的事実ではあり得ないので、それはここでは本質的ではないとして、簡略化した。

僅か二百六十二十六文字の中で、多少複雑な舞台設定を構成している事こそが、般若心経をひも解く上で、特に重要な意味を持つ。

般若心経は、観音様が、仏陀の一番弟子の舍利子に対して説いた、という設定のシナリオになっており、舍利子はこの教えで大きく覚醒し、それが教典としてまとめられた、という設定である。

般若心経は、実際には仏陀入滅後、数百年の時代に編纂された経典であり、当然、舍利子は仏陀と同時代の人だから、編纂時には生存しないが、舞台設定上は、舍利子は当時の初期仏教の代表者として般若心経に登場させた、考えられる。

般若心経では、最初の最初に観音様が登場し、これだけの舞台設定をして、観音様のお働きを明確に位置付けて、これからいよいよ「空からの展開」、即ち、衆生救済のための大スペクタクルが始まるわけである。

◆解説キー◆ 五蘊は皆空である、と宣言したことは【大どんでん返し】である。

五蘊皆空という衝撃的宣言

五蘊とは『世界』のことである。人間が係わって織りなす『世界』である。そして皆空とは、決して虚無ではなく、実体が無いのではなく、からっぽでもなく、それとは正反対の『超実体』としての《宇宙の理念》にその元を置き、《宇宙の理念が表現された状態》であることを意味している。

従ってこの人間が係わって織りなす『世界』はそのまま全肯定されて存在しているのである。

□この段階では、観音様によって、次節以降に語られる、本質的な空については、未だ触れていない段階の発言である。

厳密には、第三節で定義される空と、第四節で定義される空相は、より本質的な空であり、それを含めての五蘊皆空とする観音様の発言として理解しなければならない。従って、それを含めての『世界』は全肯定されている」とする解釈である。

正確には全部の空が出そろって第四節まで待つて解釈しなければならない。

□この第二節は観音様が観音様の立場からの見解を示しているのであり、それは当然、時間軸を超越した、最も深い空（後述）の立場からの発言であり、般若心経に於いては、時間軸に拘束された現実世界を生きる我々「人間」の見解と、明確に区別されるのである。

しかし観音様の見解こそ、最も本質的な《全存在》に関する見解として、最初にそれを示しているのだ。ここで、観音様と『人間』とは、その本質は同じであることは後に明らかになる。

□般若心経は五蘊皆空という観音様の見解が最初に出てくる。

そこで先ず、詳しい説明は後回しにして、五蘊皆空の結論から示そう。

五蘊皆空とは、即ち『世界』は、このままで既に「空の性質を持つ状態」であり、即ちそれは皆空である。《全存在》とは、このままで既に《宇宙の秩序》そのものであり、《宇宙の理念》を表現している存在である。そして、現実世界は《宇宙の理念が表現された状態》の中にある。

《全存在》とは、既に全肯定されている存在である。

《全存在》の中で、『人間』とは、苦厄があるなら、苦厄を含めて、迷いがあるなら、迷いを含めて、錯覚があるなら、錯覚を含めて、既に、救われた状態にある。

□だから、これから悟るのではない、これから救われるのではない。これから、《宇宙の理念》に繋がるのではない。これから、空に成るのではない、言う意味である。

□もちろんこれは、観音様の立場から見た観音様の見解なのである。観音様の立場に立てば、この世界の一切が全肯定されている、ということになる。私たち『人間』も、観音様の立場に立つことが出来れば、そのように言えるのである。

ここでは、『時間軸に拘束される地上の世界では、一切が統一されておらず、『二元領域』的存在として見えている。そこで、この現実世界に生きる「人間」側からの見解を『二元領域』と呼称する。

そして、時間軸を超越した世界で活動されている観音様の立場からは、全て『多元領域』として理解され、全肯定される』という事実のみを記憶して先に進もう。

観音様の立場からの見解はさらに、空の分類と定義を終えてから、巻頭図を参照のこと。

時期が来ている人であれば、この真実を知っただけで、最初の大きな悟りを得るだろう。そして、自分の今後の生き方が、明確に決定される人が、沢山出て来ると思う。そして、この時点で、人生の根本的な苦厄の解決は約束されたことになる。

□あなたが、これを知って、観音様の立場に立つことが出来て、『これで私は悟った』と言うなら、それまでである。その場合は、もうこれ以上の説明は必要が無い。これ以上説明すればするだけ、本質から離れていく。

『多元領域』と『二元領域』

□あなたが、『これで私は悟った』と言うなら、私はそれを拒否は出来ない。五蘊皆空として、全ては全肯定された『世界』なのだから、これで良いのだとする悟りは確かにある。

ただし、後に空は複数種類が定義されるが、この空は皆空（「空性A+」と表記・後述）と分類され、定義される。

それは、『たとえ無一文になろうと、自分が死のうと、身近な者が死のうと、天変地異が起ころうと、如何に苦しもうと、恐怖があろうと、不安があろうと、それが空なのだから、それで良いのだ。全ては、成るべくして成っているのだ』とすることだ。

この生き方は、今大きな困難に直面しているときには、勇気を奮い立たせてくれる。生きるための強い勇気を与えてくれる。そして、そこで学ぶことは多々ある。

悟りは、一人一人異なるので、安易に、優劣を付けたくはないが、これで悟れるとすれば、そしてこれを一生続けることが出来るのであれば、それは高度な悟りであろう。これを「悟りA」とする。

□ここまでで、般若心経の主張の主題である、五蘊皆空と、ここでの空の意味は理解できたと思う。

[五蘊皆空という衝撃的宣言] で示したように、これで全てであり、これを悟りとして、それを自覚するなら、般若心経はここで終了である。

読者は、『世界』を、そして自分をそのまま完全肯定したことで、絶対の安心感を得ることが出来た筈だ。

間違いなく、この安心感は救われの第一歩であり、重要な悟りの第一歩である。

この『多元領域』的悟りはすばらしい。これで、如何なる人生の困難をも、乗り切れるような気がしてきた。これは「悟りA」の見解である。「悟りA」は観音様の見解に対応している。

読者は、先ず、この大安心を十分に味わっていただきたい。

もし、可能ならば、この大安心を一年かけてじっくりと味わってから、次に進んでいただきたい。ただし、一年以上は必要無い。

・・・・・・・・・・・・・・・・(一年経過)

□さてここで、『だが、しかし・・・、』なのである。

私は空を体験した一人の『人間』として、『これで、救われた』『これで、「悟りを得た」』、とするのは、いかにも早すぎる、と考える。

五蘊を、即ち自分自身を含めた《全存在》を、『多元領域』的に全肯定出来たことは、とてもすばらしいことだが、この感動を持続しつつ、現実の世界の、日常生活に戻った瞬間から、たちまちこの大真理は、このままではかなり無理があることに気づく筈だ。

そこで、多くの空の体験者は、ここから現実而降りて、現実生活の中に、現実的な悟りを目指すものだ。この悟りを「悟りB」とする。

そこで、般若心経の解釈はここで二つに分かれることになるが、私は躊躇無く、現実生活における「悟りB」を求める立場である。以下、この方針で解釈を進める。

ただし、「悟りB」は、「悟りA」の一時的体験があつての「悟りB」でなければならない。先ず、「悟りA」を知識としてでも、体験していただきたい。

「悟りA」の中では、様々な問題に直面し、それはそのまま「悟りB」に引き継がれて、その中で生きてくることになる。

□五蘊皆空を額面通り受け取れば、既に全肯定された『世界』なのだから、今さら般若波羅蜜多を行じる必要も無いと言うことになる。

五蘊皆空の原理に従って、苦厄も《宇宙の理念が表現された状態》である、と自分に言い聞かせても、やはり現実には、決して無視は出来ない、決して逃げられない苦厄の実態は残るのだ。

同様に、五蘊皆空を、他人の苦厄に対して、当てはめてしまうと、実に思いやりの無い、不自然な思考と行動に成りがちであり、現実世界からは排斥されかねない。

山に籠もって一人で生きながら修行するのであれば、『これで悟った』として、仙人のように生きるのでも良いと思うが、この現実世界で生きる限りには、この現実を決して無視せずに、決して逃げずに、正面から捉える必要があることに気づく筈だ。

私に言わせれば、このすばらしい真理を如何にして、日常の現実の生活の中に下ろして、如何にして、それを、人生を生きることの実践に繋げていくか、という大問題が大きく横たわっている、と言えるのだ。

そして、この大問題こそ、これから人生をかけて、格闘しなければならない大きな課題なのである。

これからは、この五蘊皆空による大安心感を大切に、何かあればこの大真理に戻り、後は現実を生きるための方法と、この第一の悟りにふさわしい真摯な心の姿勢を求めていかなければならない。

この行程こそ、第五節から始まる「無の修行」なのである。

◆解説キー◆ 『二元領域』は錯覚であるが、肉の身を持つ限り、完全解消は不可能である。その前提で『人間』は現実世界を生きるのだ。

□そこで、ここからは、時間軸を超越した、『多元領域』の悟りの世界の発想から、時間軸に縛られた、現実の『二元領域』の世界で、普通の「人間」に戻って、一步一步を歩むことになる。

観音様の立場で『多元領域』の世界から、空を説くのであれば極めて単純であり、明快である。そうすれば般若心経は直ぐに完結するのだ。

しかし、般若心経の趣旨はこの視野の狭い「人間」のために、その『人間』が悟りを得る道筋を示しながら、説くのであり、これは大変な作業となるのだ。「人間」から見る限り、悟りを得たとしても、《宇宙》が直接見えているわけではなく、現実の世界は『二元領域』の世界のままである。

《宇宙》全体を見通していない限り、常に『二元領域』の世界なのである。悟りを得ると言うことは『二元領域』の世界に生きていながら、『多元領域』の世界に繋がって居ることを知って、思考し行動するということなのだ。

「人間」の現実に合わせて説くことから、『二元領域』の世界に合わせて行くことになる。私の現代用語による表現も、「悟りA」の立場の『既に悟っている』から、「悟りB」の立場の『これから悟りを得る』という、一見、悟りの世界から後退したような表現になると思うが、それが現実的表現法であることを、読者は次第に理解するだろう。

観音様による苦厄からの救済

◆解説キー◆ 観音様の登場には重要な意味がある。

□般若波羅蜜多は空の立場から、度一切苦厄とは、観音様のお導きによる救済活動であり、現実世界に生きる「人間」達に働きかけて、《宇宙の理念》をそこに表現することで、人類の抱える苦厄を解決し、《宇宙の生命活動》が成就することである。

このような理解でこそ、救済のための動きにも、真の迫力が、出てくることになる。これを観音様による、空の立場に立った「空からの展開」と呼称する。

救済とはまさに、空の立場に立った「空からの展開」により、現実世界に生きる「人間」達に《宇宙の理念》を表現することに他ならない。そしてそれは現実世界に《宇宙の理念》を表現することに他ならない。

さらに言えば、現実世界と現実世界に生きる「人間」達は既に《宇宙の理念が表現された状態》である事を確認する事に他ならない。

混乱しているように見える現実世界であっても、五蘊皆空であるから、勝手に動いているのではなく、『宇宙の理念』の下にあって、実は完璧な『宇宙の秩序』のコントロールの下に営まれ

ていることを知ることである。

現実世界に《宇宙の理念》を表現しないで、救済、救済と言っても、苦厄の部分修正や一部先送り程度のことであり、それでは実に迫力に乏しいものである。

現実世界を実体が無いものとして、空虚なものとして、無常なものとして、それで救済しようとしても、それでは地に足がついた救済には成らないだろうし、大いなる矛盾なのだ、言うことも般若心経は明確に示している。

□初期仏教においては、苦厄とは排除すべきものであり、その原因を追及し、排除することで、苦厄をある程度は克服出来た筈だ。

仏陀の弟子達は舍利子を筆頭に、苦厄を超えよう、肉体の制約を超えよう、修行の障害になる様々な錯覚や執着をを超えよう、として「無」の修行をしてきた筈だ。そして空の入り口には至ることが出来た。そして、これでいつ時、個人は救われたこともあった。

これらの事実から、初期仏教であっても、それは間違いなく、悟りへ向かう道であった、私は確信している。

何故なら、五蘊皆空とは全肯定であるから、初期仏教をも、大乘仏教に至る過程として、肯定しなければ自己矛盾を起すからである。

□一方、観音様に導かれる「空からの展開」においては、五蘊皆空の原理から、『五蘊とは《宇宙の生命活動》として《宇宙理念》が表現された状態であり、そこに真実があり、一切の出来事に必然性があり、苦厄ですら、そして必要が無いとした苦厄ですら、意味があって与えられているものであり、従って、錯覚ですら意味があって与えられているのだ』と、全肯定されたものとして、理解する。

それが、「空からの展開」として、悟りを完成させる最高の教えとして、般若波羅蜜多の瞑想と行が位置付けられる所以である。

◆解説キー◆ 般若波羅蜜多の瞑想と行。

□般若波羅蜜多の瞑想と行とは、最高の瞑想と行であり、その背景には、当時の初期仏教の修行の積んだ弟子達に対する、再教育的な瞑想と行であることを示唆している。

それ故に、この場面に観音様を登場させて、初期仏教の教えを否定した上で、『五蘊は皆空である』として、五蘊を完全肯定したところに、極めて大きなインパクトがあり、そこに舍利子も強い感銘を受けた、いう筋書きである、と私は理解した。

観音様の登場にはもう一つの重大な理由がある。それは「悟りB」における苦厄の解決には、観音様の存在が不可欠なのである。読者は、最後まで読み進むにつれて、それを十分に理解するだろう。

□そして衆生救済を意味する「空からの展開」では、五蘊とは決して虚無ではなく、五蘊は初めから空として《宇宙の秩序》の中に、全肯定されて存在していることが示された中からの思考と行動になるので、大安心からの思考と行動となる。初期仏教との、この違いは極めて大きい。

そして重要な事は、般若波羅蜜多の瞑想と行において、空に成る事が悟りの唯一の目的ではなく、空に到達してから、「空からの展開」のために、現実世界に再び降りてきて、《宇宙の理念》を現実世界に表現することをもう一つの目的としている。

□般若心経の主張とは、『般若波羅蜜多の瞑想と行により、空を深めて、自分の悟りを完成する

だけではなく、観音様の導きで、他者に働きかけて、苦厄を解消し、衆生救済、社会、国家、人類の救済へと展開する「空からの展開」へと移行する』とすることである。

仏教とは哲学的ではあっても、救済を説くと言う点で、まさに宗教である。そしてもし、救済の力がなければ、それは宗教とは言えない。

□サンスクリット語原典に度一切苦厄は入っていなかった。

【サンスクリット語直訳】を確認すれば分かるように、私がこの中で極めて重要だとした、度一切苦厄は、実はサンスクリット語の原典には存在していない。宮元氏によれば、玄奘三蔵によって、他の経典から取り入れられたとのことである。

そこで、この経緯をどう位置付けるか、の問題が発生する。

原典ほど正しいのであれば、原典に戻るべきであるという主張が正しそうだが、私は必ずしもそうは思わない。

もし、原典に戻ることで度一切苦厄が消えてしまうと、般若心経が衆生救済の目的であることも、観音様による救済の働きの重要さも、薄まってしまうことになる。仏教が宗教である限り、度一切苦厄が有った方が衆生救済の趣旨はより明確になる。

□仏教は展開発展する。

私は、仏教の「展開発展説」の立場をとる。仏教の本質として、常に展開発展することで、時代に対応し、時代時代に大人物が生まれて、その時代の要請に応え、その時代のやり方で衆生救済を実現しようとし、そして経典は多くの編纂者の手を経て、展開発展していく。ただし、本質から離れていく歪んだ方向の動きも必ず侵入してくるから、それは徹底排除しなければならない。

前の時代までに先人たちが蓄積した大きな実績の上に立って、次の時代の人たちが、時代に合わせて、一部を切り捨て、一部新しいものを取り入れ、次の時代を構築していくのだ。

しかしながら、新しいものは常に玉石混淆である。玉石混淆だからこそ、その中には必ず次の時代を作るための発展の兆しがあるので、それを発見して、新しい芽を育てていく必要がある、とするのが私の見解である。

般若心経はサンスクリット語の原典を基とし、玄奘三蔵によって展開発展し、一つ前進した、と私は考えている。

それは即ち、私は、度一切苦厄を新たに取入れた玄奘三蔵編纂の般若心経を一旦そのまま受け入れるという意味になる。一方、切り捨てられた部分にも再吟味が必要である。記録が残っていればそれは十分可能である。

□よく考えてみれば、大乘仏教が初期仏教を否定する形で、新しく生まれた経緯も、仏教の「展開発展説」で説明できる。

もし、仏教の「展開発展説」を否定すると、初期仏教を否定する形で生まれた大乘仏教そのものが仏教としては存在できないことになる。大乘仏教は仏教以外の別の宗教になってしまうのだ。

ところで、自然科学や科学技術はまさに、展開発展説そのものである。学術研究者の世界ではそれが当然のことであり、誰も否定する人はいない。

私は学術研究者として、徹底して訓練された経験があるので、このように考えることに全く抵抗が無い。

第二節 おわり